泉鏡花作

『繪本の春』

全一章

もとの邸町の、荒果てた土塀が今も其のまゝに成つて居る。……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの　――　山國で　――　石のごつ／＼した狭い小路が、霞みながら一條煙のやうに、ぼつと黄昏れて行く。

彌生の末から、些とづゝの遅速はあつても、花は一時に咲くので、その一ならびの塀の内に　、桃、紅梅、椿も櫻も、或は滿開に、或は初々しい花に、色香を装つて居る。石垣の草には、蕗の薹も萌えて居よう。特に桃の花を眞先に擧げたのは、むかし此の一廓は桃の組と云つた組屋敷だつた、と聞くからである。其の樹の名木も、まだ其方此方に殘つて居て麗に咲いたのが……恁う目に見えるやうで、それが又如何にも寂しい。

二條ばかりも重つて、美しい婦の虐げられた　―

―　舊藩の頃には何處でもあり來りだが　――　傳

説があるからで。

通道と云ふでもなし、花は此の近處に名所さへあるから、故とこんな裏小路を捜るものはない。日中も殆ど人通りはない。妙齡の娘でも見えようものなら、白晝と雖も、それは崩れた土塀から影を顯はしたと、人を驚かすであらう。

其の癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所の山へ、絡繹として、花見、遊山に出掛けるのが、此の前通りの、優しい大川の小橋を渡つて、ぞろ／＼と歸つて來る、男は膚脱ぎに成つて、手をぐたりとのめり、女が媚かしい友染の褄端折で、咥楊枝をした醉拂まじりの、浮かれ浮かれた人數が、前後に揃つて、此の小路をぞろ／＼通るやうに思はれる：：：まだ其の上に、小橋を渡る跫音が、左右の土塀へ、其處を蹈むやうに、とろ／＼と響いて、然もそれが手に取るやうに聞えるのである。

——此のお話をすると、いまでも私は、まざ／＼と其の景色が目に浮ぶ。——

處で、いま言つた古小路は、私の家から十町餘りも離れて居て、縁で視めても、二階から伸上つても、それに……地方の事だから、板葺屋根へ上つて（〓）しても、實は建連つた賑な町家に隔てられて、その方角には、橋はもとよりの事、川の流も見えないし、小路などは、たとひ見えても、松杉の立木一本にもかくれて了ふ。……第一見えさうな位置でもないのに――いま言つた黄昏になる頃は、いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山ばかりか、我が家の町も、門も、欄干も、襖も、居る疊も、あゝ／＼我が影も、朦朧と見えなく成つて、國中、町中に唯一條、其の桃の古小路ばかりが、漫々／＼として波の靜な蒼海に、船脚を曳いたやうに見える。見えつゝ、面白さうな花見がへりが、ぞろ／＼橋を渡る跫音が、約束通り、とととと、どど、ごろ／＼と、且つ亂れて其處へ響く。……幽に人聲――女らしいものも、ほゝゝ、と聞えると、緋桃がぱッと色に亂れて、夕暮の櫻もはら／＼と散りかゝる。……

直接に、そゞろに其處へ行き、小路へ入ると、寂しがつて、氣味を惡がつて、誰も通らぬ、更に人影

はないのであつた。

氣勢はしつゝ、……橋を渡る音も、隔つて、聞こえはしない。……

桃も櫻も、眞赤な椿も、濃い霞に包まれた、朧も暗いほどの土塀の一處に、石垣を攀上るかと附着いて、……つゝじ、藤にはまだ早い、——荒庭の中を覗いて居る——絣の筒袖を着た、頭の圓い小柄な小僧の十餘りなのがぽつんと見える。

其奴は、……私だ。

夢中でぼかんとして居るから、もう、とつぷり日が暮れて塀越の花の梢に、朧月のやゝ斜なのが、湯上りのやうに、薄くほんのりとして覗くのも、そいつは知らないらしい。

丁ど吹倒れた雨戸を一枚、拾つて立掛けたやうな破れた木戸が、裂めだらけに閉してある。其處を覗いて居るのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどつた白紙で、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染め

た、それがほのかに讀まれる　――　紙が樹の隈を分けた月の影なら、字もたゞ花と莟を持つた、桃の一枝であらうも知れないのである。

其處へ……小路の奥の、森の覆つた中から、葉をざわ／＼と慣らすばかり、背の高い、色の眞白な、大柄な婦が、横町の湯の歸途と見える、……化粧道具と、手拭を絞つたのを手にして、陽氣は此だし、のぼせもした、……微醉もそのまゝで、ふら／＼と花をみまはしつゝ近づいた。

巣から落ちた木菟の雛ッ子のやうな小僧に對して、一種の大なる化鳥である。大女の、わけて櫛巻に無雑作に引束ねた黒髪の房々とした濡色と、色の白さは目覺ましい。

「おや／＼……新坊」

小僧は矢張り夢中で居た。

「おい、新坊。」

と手拭で頬邊を、つるりと撫でる。

「あツ。」

と肝を消して、

「まあ、小母さん。」

ベソを掻いて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。父さんに言つては可厭だよ。」

と、あはれみを乞ひつゝ言つた。

不氣味に凄い、魔の小路だと言ふのに、婦が一人で、湯歸りの捷道を怪んでは不可い。……實は此の小母さんだから通つたのである。

つい、（乙）の字なりに畝つた小路の、大川へ出口の小さな二階家に、獨身で住つて、門に周易の看板を出して居る、小母さんが既に魔に近い。婦で卜筮をするのが怪しいのではない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知つて居る。

大女の小母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の眞夜中に蘇生つた。その時分から酒を飲んだから酔つて轉寢でもした氣で居たらう。力はあるし、棺桶をめり／＼と鳴らした。それが高島田だつたと云ふから尚ほ希有である。地獄も見て來たよ　――　極楽は、お手のものだ、と卜筮ごときは掌である。且つ寺子屋仕込みで、本が讀める。五経、文選すら／＼で、書がまた好い。一度冥途を彷徨つてからは、佛教に親んで參禪もしたと聞く。――　小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手習傍輩で、然う毎々でもないが、時々は往來をする。何ぞの用で、小僧も使ひに遣られて、煎餅も貰へば、小母さんの易をトる七星を刺繍した黒い幕を張つた部屋も知つて居る、その往戻りから、フト此のかくれた小路をも覺えたのであつた。

此の魔のやうな小母さんが、出口に控へて居るから、怪い可恐いものが顯はれようとも、それが、小母さんのお夥間の氣がするために、何となく心易くつて、いつの間にか、小兒の癖に、場所柄を、然して憚らないで居たのである。が、學校をなまけて、不思議な木戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父

親の傍輩に見つかつたのは、天狗に逢つたほど可恐しい。

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく背を押したのだけれども、小僧には襟首を抓んで引立てられる氣がして、手足をすくめて、宙を歩行いた。

「肥つて居ても湯ざめがするよ。——もう春だがなあ、夜はまだ寒い。」

と、納戸で被布を着て、朱の長煙管を片手に、

「新坊、——あんな處に、一人で何をして居た？……小母さんが易を立てゝ見てあげよう。二階へおいで。」

月、星を左右の幕に、祭壇を背にして、詩經、史記、二十一史、十三經注疏なんど本箱がづらりと並んだ、手習机を前に、づしりと一杯に、座蒲團に坐つて、蔽のかゝつた火桶を引寄せ、顔を見て、ふと

つた頬でニタ／＼と笑ひながら、長閑に煙草を吸つたあとで、圓い肘を白くついて、あの天眼鏡と云ふのを取つて、ぴつたりと額に當てられた時は、小僧は悚然として震上つた。

大川の瀬がさつと聞こえて、片側町の、岸の松並木に風が渡つた。

「……かし本。——　ろくでもない事を覚えて、此奴めが。こんな變な場處まで捜しまはるやうでは、彼處、此處、町の本屋をあら方あらしたに違ひない。道理こそ、お父さんが大層な心配だ。……新坊、小母さんの膝の傍へ。——　氣をはつきりとしないか。えゝ、あんな裏土塀の壊れ木戸に、かしほんの貼札だ。……そんなのもがあるものかよ。いまも現に、小母さんが、おや、新坊、何をして居る、と少時熟と視て居たが、そんなはり紙は氣も影もなかつたよ。——　何だとえ？……晝間來て見ると何にもない。……日の暮から、夜へ掛けてよく見えると。——　それ、それ、それ見な、これ、新坊。坊が立つて居た、あの土塀の中は、もう家が壊れて草ばかりだ、誰も居ないんだ。荒庭に古い祠が一つだけ殘つて居る……」

と云ひかけて、ふと獨で頷いた。

「こいつ、學校で、勉強盛りに、親がわるいと言ふのを聞かずに、夢中に成つて、餘り凝るから魔が魅した。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新坊や、可恐い處だ、彼處は可恐い處だよ。――聞きな。――おそろしく成つて歸れなかつたら、可い、可い、小母さんが、町の坂まで、此の川土手を送つて遣らう。

――舊藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がつた侍が居てな、御主人の難病は、巳巳巳巳、巳の年月の揃つた若い女の生肝で治ると言つて、――よくある事さ。いづれ、主人の方から、内證で入費は出たらうが、金子にあかして、其の頃の事だから、人買の手から、その年月の揃つたと言ふ若い女を手に入れた。あらう事か、俎はなからうよ。雨戸に、その女を赤裸で鎹で打つたとな。……これ／／、まあ、聞きな。……眞白な腹をずぶ／／と刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛けた戸は、その雨戸かも知れないよ。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであつた。

「酷たらしい話をするとお思ひでない。――聞きな。さてとよ……生肝を取つて、壺に入れて組屋敷の陪臣は、行水、嗽に、身を潔め、麻上下で、主人の邸へ持つて行く。お傍醫者が心得て、

……此だけの薬だもの、念のため、生肝を、生のもので見せてからと、御前で壺を開けるとな。

……血肝と思つた眞赤なのが、糠袋よ、なあ。麝香入の匂袋ででもある事が――坊は知るまい、女の膚身を湯で磨く……氣取つたのは鶯のふんが入る、糠袋が、それでも、殊勝に、思はせぶりに、びしよ／＼ぶよ／＼と濡れて出た。いづれ、身勝手な――病のために、女の生肝を取ろうとするやうな殿様だもの……またものは、歸つて、腹を割いた婦の死体をあらためる隙もなしに、やあ、血みどれに成つて、まだ動いて居まする、とおのが手足を、ぼた／＼と遣りながら、お目通、庭前で斬られ

たのさ。

いまの祠は……だけれど、その以前からあつたと言うが、其のあとの邸だよ。尤も、幾度も代は替つた。

――餘りな話と思はうけれど、昔ばかりではないのだよ。現に、小母さんが覺えた、……こゝへ一昨年越して來た當座――夏の、しら／＼あけの事だ。――あの土塀の處に人だかりがあつて、がや／＼騒ぐので行つて見た。若い男が倒れて居てな、……用向うの新地歸りで、――小母さんも一寸見知つて居る、些とたりないぼとの色男なんだ――それが……醫者も驅附けて、身體を檢べると、あんぐり開けた、口一杯に、紅絹の糠袋……

「……」

「糠袋を頬張つて、それが咽喉に詰つて、息が塞つて死んだのだ。どうやら手が届いて息を吹いだが、……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美し

いお嬢さんの、湯歸りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の眞似だか知らないが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ぺろりと其の眞赤な舌。

小僧は太い白蛇に、頭から舐められた。

「その舌だと思つたのが、咽喉へつかへて氣絶をしたんだ。……舌だと思つたのが、糠袋。」

と又、ぺろりと見せた。

「厭だ、小母さん。」

「大丈夫、私がついて居るもんだもの。」

「然うぢやない。……小母さん、僕もね、あすこで、きれいなお嬢さんに本を借りたの。」

「あ。」

と圓い膝に、揉み込むばかり手を据ゑた。

「もう、見たかい。……えゝ、高島田で、紫色の衣ものを着た、美しい、氣高い……十八九の。……あゝ、惡戯をするよ。」

と言つた。小母さんは、そのおばけを、魔を、鬼を、——あゝ、惡戯をするよ、と獨言して、その時はじめて眞顔に成つた。

私は今でも現ながら不思議に思ふ。晝は見えない。逢魔が時からは朧にもあらずして解る。が、夜の裏木戸は小兒心にも遠慮される。……かし本の紙ばかり、三日五日續けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所がら歸つたらしく、背へ來て、手をとつて、荒れた寂しい庭を誘つて、その祠の扉を開けて、燈明の影に、繪で知つた鎧びつのやうな一具の中から、一冊の草双紙を。

……

「——繪解きをしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉などの、話して

きかせるのを繪解と言つた。）――　讀めますか、假名ばかり。」

「はい、讀めます。」

「いゝ、お兒ね。」

きつね格子に、其の半身、やがて、臈たけた顔が覗いて、見送つて消えた。

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、階子段を、父に見せまいと、驅上る時に、――　歸つたかと、聲がかゝつて、ハッと思ふ、……懷中に、どうしたか失せて見えなく成つた。たゞ、内へ歸るのを待兼ねて、大通りの露店の灯影に、歩行きながら、ちら／＼と見た、繪と、かながきの處は、――

こゝで小母さんの話した、――　後のでない、前の巳巳巳の話であつた。

私は今でも、不思議に思ふ。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたやうに目に映る。……

大正……年……月の中旬、大雨の日の午の時頃から、其の大川に洪水した。――水が軟に綺麗で、流が優しく、瀬も荒れないと云ふので、――昔の人の心であらう――名の上へ女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七―月七日、大雨の降續いた其の七日七晩めに、町のもう一つの大河が可恐い洪水した。七の數が累なつて、人死も夥しいかつた。傳説じみるが事實である。が、其の時さへ此の川は、常夏の花に紅の口を漱がせ、柳の影は黒髪を解かしたのであつたに――

尤も、話の中の川堤の松並木が、やがて柳に成つて、町の目貫へ續く處に、木造の大橋があつたのを、此の年、石に架かへた、工事七分と云ふ處で、橋杭が鼻の穴のやうに成つたため水を驚かしたのであらうも知れない。

僥倖に、白晝の出水だつたから、男女に死人はない。二階家は其のまゝで、辛うじて凌いだが、平屋は殆ど濁流の瀬に洗はれた。

若い時から、諸所を漂泊つた果に、其の頃、やつと落着いて、川の裏小路に二階借した小僧の叔母にあたる年寄がある。

水の出盛つた二時半頃、裏向の二階の肱掛窓を開けて、立ちも遣らず、坐りもあへず、あの峰へ、と山に向かつて、膝を宙に水を見ると、肱の下なる、廂屋根の屋根板は、鱗のやうに戦いて、——北國の習慣に、壓にのせた石の數々は僅かに水を出た磧であつた。

つい目の前を、あゝ、島田髷が流れる……緋鹿子の切が解けて浮いて、トちらりと見たのは、一條の眞赤な蛇。手箱ほど部の重つた、表紙に彩色繪の草紙を巻いて——鼓の轉がるやうに流れたのが、忽ち、紅の雫を擧げて、其の並木の松の、就中、山より高い、二三尺水を出た幹を、ひら／／と昇つて、聲するばかり、水に咽んだ葉に隠れた。——瞬く間である。——

そこら、屋敷小路の、荒廢離落した低い崩土塀には、凡そ何百年來、いかばかりの蛇が巣くつで居た

らう。蝮が多くて、水に浸つた軒々では、その害を被つたものが少くない。

高臺の職人の屈竟なのが、二人づれ、翌日、水の引際を、炎天の下に、大川添を見物して、流の末一里有餘、海へ出て、暑さに泳いだ豪傑がある。

荒海の磯端で、肩を合はせて一息した時、息苦しいほど蒸暑いのに、颯と風の通る音がして、思はず背筋も悚然とした。……振返ると、白濱一面、早や乾いた蒸氣の裡に、透なく打つた細い杭と見るばかり、幾百條とも知れない、おなじやうな蛇が、おなじやうな状して、おなじやうに、揃つて一尺ほどづゝ、砂の中から鎌首を擡げて、一斉に空を仰いだのであつた。その畝る時、歯か、鱗か、コツ、コツ、コツ、カタ／／＼カタと鳴つて響いた。——洪水に巻かれて落ちつゝ、はじめて柔い地を知つて、砂を穿つて活きたのであらう。

きやツ、と云ふと、島が眞中から裂けたやうに、二人の身體は、濱へも返さず、浪打際をたゞ礫のやうに左右へ飛んで、裸身で逃げた。

泉鏡花文庫『鏡花花鏡』の藏書

【完】